

[書評・紹介]

東南アジア民族誌の現在

高谷 紀夫

民族誌 (ethnography) の記述は、文化人類学を志す者にとって、研究過程での目標であり通過点である。人類学者とフィールドとの対話から記述される民族誌は、人類学者が依拠する理論的志向と幾度もフィードバックされ、構成されていく特質を有している。

ここ数年来、東南アジアをフィールドとする民族誌の出版が相次いでいる。列挙すれば

宮本 勝 1986 『ハヌノオ・マンヤン族——フィリピン山地民の社会・宗教・法』(第一書房) 384頁 3,000円

山下晋司 1988 『儀礼の政治学——インドネシア・トラジャの動態的民族誌』(弘文堂) 313頁 4,700円

合田 壽 1989 『首狩りと言霊——フィリピン・ポントック族の社会構造と世界観』(弘文堂) 392頁 7,500円

清水 展 1990 『出来事の民族誌——フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』(九州大学出版会) 384頁 5,768円

などである。言及したすべてが1970年代に本格的なフィールド・ワークを開始した人類学者の筆によるものであり、10余年にわたって深めてきたフィールドとの対話と理論形成の結実である。本文ではその中から山下氏と清水氏の著作を紹介することにした。

山下氏の著書は、内堀基光氏との共著『死の人類学』(1986, 弘文堂)と連なるものである。先作ではボルネオ島のイバンとスラウェン島のトラジャとの死をめぐる位相を対比するという二極構成が仕掛けられていたのに対し、本書はトラジャの社会と文化に対する全体的 (holistic) なアプローチ上に展開されている。採用された手法は、ミクロな世界としてのトラジャ社会との対話と、トラジャを内包するマクロなレベルとしてのインドネシア国家さらには世界システムについての解釈との結合である。そしてその目標とされたのは「時間的にも空間的に

もマクロなシステムを射程に入れ、そのなかで社会と文化の動態を検討する民族誌」すなわち動態的民族誌である。この民族誌の方法論と人類学の理論的視界の開拓は本書を貫く明確な問題意識となっている。

本書の構成は三部よりなる（第一部：動態的民族誌の枠組み、第二部：トラジャの儀礼的世界、第三部：国家のまなざしのなかで）。第一部では本書を支える骨格として人類学的理解のための民族誌研究の枠組みが掲げられる。それを受けて具体的に第二部でトラジャ社会の儀礼のパフォーマンスについての詳細な記述が展開される。第三部においてはトラジャの儀礼的世界を国家というマクロなレベルから捉え直すことで、トラジャの文化の動態とくに1970年代以降のインドネシア国家の民族政策の脈絡で解明が試みられる。

トラジャは伝統的に階層社会であり、地位・富・威信の頭在化と維持が人々を規範的に支えてきた。今日の行政組織下においても、かつての首長制の伝統は強い拘束力をもって人々の生活を律している。著者が着目するのは、家と首長国の間に位置する儀礼共同体と呼ぶレベルでの儀礼のパフォーマンスの動態である。

本書の三部構成の中でもっとも力点がおかれているのは儀礼の世界を描く第二部の各章である。トラジャの伝統宗教はアルック・ト・ドロということばで表現される。その根幹は儀礼の実践にあり、伝統的儀礼体系は二つのカテゴリーに基本的に分かれる。東側の儀礼と呼ばれる神々に対する儀礼と西側の儀礼と呼ばれる死者の儀礼（死者祭宴）である。第五、六章がそれぞれの描写と考察にあてられている。トラジャの死者祭宴は、規模によってランクづけがなされ、その決定は死者の家族の社会的地位、経済状態、威信を反映している。本書の核心部分である第五章では、第二節の事例、第三節の死の儀礼のプロセスと詳細な描写を経て、第四節の社会劇としての死、第五節の肉の政治学の観点から考察がなされる。その際導入される社会劇の分析概念はターナー V. W. Turner による。社会過程の劇的構造は、トラジャ社会の死者祭宴において顕著に現出すると著者は語る。トラジャの人々の経済的基盤は水田である。また家畜とくに水牛は、もっとも重要な富の象徴である。死者祭宴においては、多量の水牛（あるいは豚）の供犠という形で富の破壊がなされる。富の破壊は水田の遺産相続権をめぐる争いと関係している。また供犠された肉は政治的配慮のもとに地位社会の構造にそって分配される。分配された肉を食べることは祭宴主催者の権力傘下に入ることを意味するのである。祭宴は他共同体への富と組織力の誇示ともなる。このようにし

死者祭宴は社会劇として描かれながら、多層な政治的思惑の絡む政治的パフォーマンスとして考察が加えられる。著者の分析は、この儀礼的世界をトラジャ社会の権力構造と秩序が再生産される儀礼の政治学として評価していくのである。

社会的影響力が強く盛大化する死者祭宴と対照的なのは、縮小化の途をたどる生の祝祭である東側の儀礼である。この不均衡とも言えるアルック・ト・ドロの変化が第三部でマクロな視点から解明されていく。トラジャの社会と文化が経験してきた変化は、文化伝統の衰退を意味していない。1970年代に入ってその変化は、逆に伝統文化を強調する結果を導いたと分析される。この動態は二つの展開から提示される。ひとつは拡大する社会の外延に対する文化伝統の隆盛化という形での人々の反応である。当時のトラジャの儀礼体系は、オランダ植民地時代に端を発するキリスト教の導入により東側の儀礼が異郷の神々に対するものとしてすでに減少しつつある一方で、死者儀礼はしたたかに生きのび逆に盛大化してきたのである。著者はこれを文化のインボリューションと呼ぶ。いまひとつのしかも新しい展開は、1969年のアルック・ト・ドロの政府公認以降に顕在化するトラジャ社会への国家の介入である。国家の介入とは、スハルト政権によるインドネシアの政治と文化の再編成の動向を意味し、トラジャでは観光開発と結びついた伝統的儀礼の強調という形で現象化したのである。これらの動向が、人々の伝統文化に対する評価、さらにはアイデンティティに変化を及ぼしたことはいうまでもない。著者のまなざしはこれらの複雑な動態を的確にフォローしている。本書における1970年代以降のインドネシア・トラジャへの考察の試みは、人類学者が自ら時間軸の中に身をおくことで人類学がいかに歴史の相を語りうるかのひとつの答と可能性を提示しているようにも思えるのである。

清水氏の著書は、フィリピン・ルソン島西部のピナトッポ山麓に住むアエタ（ネグリート）を対象とするフィールドとの対話の結実である。著者が採用した民族誌記述のための方法論は、レヴィ=ストロース C. Lévi-Strauss の提示した「冷い社会」と「熱い社会」の理想的モデルを指針として、語られる出来事を通じて当該社会固有の存続様式を理解しようとする試みである。双系的なアエタ社会の人々の生活では、社会的経済的に「変化」を与える出来事が、それにかかわる集団が動態的に再編成される形で受容されていく。著者はその受容の過程において抽出できる一定のパターンから「持続」する体系を問い、最終的には「冷い社会」に近似するモデルとしてアエタ社会を提示していくのである。著者は出来事の単なる報告者ではない。人々の過去の出来事についての語り——イストリア

に耳を傾けながら、出来事の物語化された受容のあり方からアエタ社会の依拠する体系の持続性にアプローチしている。

考察対象の四件の出来事で、著者の力点は結婚という社会的事象をめぐるアエタの社会編成の動態にあり、核心部分である第二部を構成している。第二部について詳述する前にその背景知識ともなっている第一部の三件の出来事について簡単に紹介しておこう。

第一の出来事の事例は、著者をも巻きこんだある若者のアモックと呼ばれる一時的狂乱をめぐる周囲の人々の反応と解釈の追跡である（第三章）。第二の出来事は、アエタの農耕形態を移動焼畑から定着犁耕へと転換することを企てた開発プロジェクトの失敗の経緯であり、既存の生業システムの存続性が示される（第四章）。第三の出来事は、アエタの人々の宗教生活の基幹をなす治病セアンスである。その過程はマガニト（巫者）による一方的治療ではなく、病者及び関係者の社会的経済的さらには心理的背景を表現するコミュニケーションの即興劇として提示されている（第五章）。

第二部ではまず第六章でアエタの社会編成を考えるための基本的枠組みが提示される。アエタ社会においては、拡大家族が居住、経済、外婚単位として基礎的な集団であり、結婚は二つの拡大家族の交流を生み出す契機として機能している。第七章では、結婚の事例とそれについての人々のイストリアに則して考察が加えられる。アエタの結婚のダイナミズムは、親子間の結婚観の世代格差に基本的要因がある。親たちは既存のネットワークで結ばれた範囲内での結婚を望ましいものと考えて、子供たちに段取り婚を強制しようとする。子供たちは親に反対されてもつまり既存のネットワークを越えてでも、好きな相手と結ばれようとして駆け落ちを試みようとする。著者の視点はこの駆け落ちを積極的に評価する。この衝撃的な出来事は、男側女側双方を緊張関係に巻きこむが、双方の親族に結婚を前提とした話し合いを強要するための制度的なものであり、従来我的生活世界の拡大と再編成につながる革新的な契機となっているのである。

アエタの結婚においてもっとも重要なのがバンディの交渉と授与である。駆け落ちの際の話し合いにおいてもバンディが問題となる。バンディは治病セアンスでの悪霊の慰撫のための贈り物としての用例もある。第八章ではこのバンディをめぐる考察が展開される。バンディを「婚資」とみなす人類学の従来の理解では多様なバンディをめぐる事象を包括できない。著者は、侵犯や剝奪を受けた者の怒りを慰撫し、懐柔するために支払われるさまざまな品々を一括するカテゴリー

としてバンディを分析する。治病セアンスの場合は悪霊の慰撫と懐柔に贈られる。結婚あるいは駆け落ちの場合は、娘の贈与あるいは剝奪、娘から他者の妻へのセクシュアリティの帰属変更に伴う対立関係の修復及び秩序回復のためにバンディは支払われるのである。またアエタ社会では、結婚ではバンディを支払って妻を迎え入れる形つまり夫方居住を望ましいものと考えている。しかしながら実際には、高額なバンディのゆえに一定額のバンディ授与の段階で妻方居住が開始され、あるいはそのまま完済されないまま継続されていく場合が多い。著者は夫方居住の意味する全面的な娘の剝奪と結婚の拒絶によって結果するコミュニケーションの断絶を回避し、緊張関係から友好的な姻戚関係への転換の可能性を開くものとして妻方居住を分析していくのである。

アエタ社会の「冷さ」は、社会が静的で不動であることを意味するのではなく、出来事の衝撃を馴化し、社会の再編成を行ない、修復する過程としてのダイナミズムのもつ安定性と持続性による。「変化」という熱い出来事は、諸慣行や諸制度によって冷やされていく。この「変化」を組み込む形での「持続」の仕掛けは、双系社会のもつひとつの柔構造の現れと著者は結論づけている。

紹介した上記の二つの民族誌の間には、同じく動態論をめざしながらその目標と展開にかなりの隔たりがある。山下氏の著書は、著者がファースト・ハンドに対話したフィールドへのマイクロとマクロの視点の交錯から構成されており、その方法論は開かれた課題としての発展性を有している。清水氏の著書は、当該民族の独自性と主体性の認識の上に成立しており、冷い社会の持続的システム論としていわば完結した世界を記述している。この相違はそれぞれのフィールドの外部世界との接触状況についての評価に由来するものではあるが、その後の両氏の研究の展開にも影響が認められる。二つの民族誌が民族誌研究の二つの極であるとは思わない。だが自らの経験をいかに民族誌の記述の中に組み込むかに苦心する二つの表現型として位置づけたいと思う。人類学者は確かにあらゆるフィールドにおいてある国家と対峙し、また出来事と出会うのである。

(所属：広島大学総合科学部 〒730 広島市中区東千田町 1-1-89 TEL 082-241-1221)